

急性白血病の話

横浜掖済会病院

内科副部長 竹^{たけ}村^{むら}佐千哉^{さちや}

先頃、第一線で活躍中のアナウンサーが急性白血病にかかったとの報道がありました。これまでも俳優、歌手、格闘家、漫才師などの著名人が急性白血病になっています。急性白血病とはどのような病気でしょうか。

【急性白血病とは】

白血病には急性と慢性の2種類がありますが、急性白血病と慢性白血病は異なる病気です。急性白血病が完治しなくて慢性白血病になるわけではありません。今回は、急性白血病についてお話します。

急性白血病は「血液のがん」です。血液の中には白血球、赤血球、血小板があり、血液細胞と呼んでいます。血液細胞は、骨髄（骨の中心部分）で造られます。血液細胞は、造血幹細胞という細胞から造られますが、最初は未熟な細胞で、だんだんと成熟して最終的に完成した血液細胞になります。例えるなら、赤ちゃんが育って成人になるようなものです。急性白血病は、白血球に育っていくはずの「未熟」な細胞が「骨髄」でがん化して増えてしまう病気です。

この「未熟」な白血球の種類によって、急性骨髄性白血病と急性リンパ性白血病に分類されます。

【急性白血病の原因】

急性白血病の原因は、薬剤（抗がん剤な

ど）、有機溶剤、放射線、環境要因、毒素、遺伝的素因、ウイルスなどが考えられています。発病を予防する方法もありません。ただし「抗がん剤を使ったから」、「放射線を浴びたから」といっても、必ず急性白血病になるわけではありませんので、心配しすぎないようにしましょう。

【急性白血病の発生頻度】

急性と慢性を合わせた白血病は、1年間で10万人に5人くらいの割合で発生しています。このうち、約75%が急性白血病です。男女比は1.5対1です。急性骨髄性白血病と急性リンパ性白血病の割合は、成人では4対1で急性骨髄性白血病が多く、小児では逆に1対4で急性リンパ性白血病が多く発生します。ドラマなどでは、若い人が白血病になる設定が多いようですが、急性骨髄性白血病は50歳頃から増え始めます。急性リンパ性白血病の発生は2~3歳にピークがあります。

【急性白血病の症状】

急性白血病の症状は、発熱、咽頭痛、だるさ、動悸、息切れ、出血症状などです。この症状があれば「急性白血病」と言えるような特徴的な症状はありません。実際に急性白血病の初期は、普通の風邪と区別がつかないことも珍しくありません。また、健診などで早期発見ができる病気ではありません。

【急性白血病が疑われたら（急性白血病の検査）】

急性白血病を診断するためには、血液の検査をして白血球、赤血球、血小板の異常を調べます。急性白血病では多くの場合、赤血球の減少（貧血）や血小板の減少がみられます。白血病と聞くと「白血球が多い」という印象がありますが、白血球は増えていることも減っていることもあります。血液検査で急性白血病が疑われたら、次に骨髄の検査（骨髄穿刺や骨髄生検）をします。白血病は骨髄で発生しますから、その「現場」を調べることが必要です。骨髄の検査で急性白血病かどうか、確定診断をするとともに、急性白血病の「タイプ（病型）」を調べます。詳細は割愛しますが、急性骨髄性白血病は 20 種類以上、急性リンパ性白血病は 10 種類以上に分類されます。

【急性白血病の治療】

急性白血病を治癒させるには、白血病細胞を「根絶やし」にする必要があります。そのために、多剤併用化学療法（抗がん剤治療）や造血幹細胞移植（骨髄移植と言うこともあります）が行われます。急性白血病の治療は、「待ったなし」で始めるのが基本です。初めて行った病院で急性白血病と言われて緊急入院して、その日のうちに治療が始まることもあります。

最初の治療は、「寛解導入療法かんかいどうにゅうりょうほう」と言います。急性白血病の発症時には、白血病細胞は 10^{12} 個（1 兆個、重さで約 1kg）あります。これを抗がん剤で減らして、「一見すると急性白血病が治ったように見える状態」にします。この状態を「寛解」と言

います。しかし、寛解になっても白血病細胞は 10^9 個残っているとされています。これをさらに減少させるため、引き続いて「地固め療法」を 3~4 回おこないます。病型によっては強化・維持療法をします。

急性骨髄性白血病の治療にはシタラビン、ダウノルビシン、イダルビシンなどの抗がん剤を使います。ただし、急性前骨髄球性白血病というタイプの場合はビタミン A 誘導体のレチノイン酸が有効で、抗がん剤と組み合わせて使います。急性リンパ性白血病にはシクロホスファミド、ダウノルビシン、ビンクリスチン、プレドニゾンなどの抗がん剤を使います。急性リンパ性白血病のうちフィラデルフィア染色体を持つ特殊なものはイマチニブを併用します。

抗がん剤治療の合併症は、悪心・嘔吐、貧血、白血球減少、血小板減少、発熱、感染症、口内炎、脱毛などです。これらの合併症の中には、致命的になるものもあります。

抗がん剤以外の治療として、造血幹細胞移植がありますが、造血幹細胞移植は、年齢や病型やその他の要因（予後因子と言います）を考慮して適応を決めます。造血幹細胞移植は、体への負担も大きい治療で、急性白血病が治ったのに、移植合併症が続いてつらい思いをすることもあります。何でも移植をすればいいのではありません。

急性白血病の治療は体へ負担がかかり、決して「楽な」治療ではありませんが、そのつらさの先に治癒が待っています。

【急性白血病は治るの?】

全ての人急性白血病が治ると言えないのが残念です。急性白血病のタイプによっ

て治りやすさが違います。日本成人白血病治療共同研究グループが行った 65 歳以下の患者の治療成績は、急性骨髄性白血病の発病から 4 年後に生存している可能患者の治療成績性は約 50%で、急性リンパ性白血病の場合発病から 6 年後に生存している可能性は約 30%です。

【おわりに】

急性白血病は、突然襲ってくる憎らしい病気です。しかし、治療は進歩しています。例えば、急性前骨髄球性白血病というタイプは、以前はとても悲惨なタイプでしたが、レチノイン酸が登場したことで今では最も治りやすいタイプになりました。以前の骨髄バンクのポスターに載っていたように「白血病なんて怖くない、そういえる日が来ることを信じて（る）」世界中の学者や血液内科医が努力しています。